
学校臨床の新展開

— ⑫ 子どもたち放課後 —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

大阪市の高校でバスケットボール部の主将が顧問の教諭から体罰を受けた翌日に自殺した問題をめぐって、朝日新聞 2013 年 1 月 12 日付、桑田真澄さんの記事が目立ちます。社会で活躍する人のなかには、体育会系のクラブ活動や学校での生徒指導で教諭から体罰を受けた経験について、そのおかげで今の自分があると肯定したり、感謝したりする人が少なくありません。しかし、桑田さんは、自らも体罰を受けた経験があり、そのうえで体罰の不要を訴えているからです。桑田さんは、体罰を受けた子は、「何をしたら殴られないで済むだろう」という思考に陥り、それでは、子どもの自立心が育たず、自分でプレーの判断ができないといいます。家庭での児童虐待ケースでも同じことがいえます。子どもたちは「どうしたら殴られないか」と考え、そのために状況によって「ウソ」をつかざるを得ず、結果的にまた「ウソ」がばれて殴られるという悪循環スパイラルのケースがあります。

冷静に落ち着いて考えると「暴力」や「脅

し」は不適切、かつ意味がない人権侵害行為であるとわかりますが、一方で、「暴力」や「脅し」は一定の効果をもたらすことも事実です。それは、一番手っ取り早く、相手を意のままに動かすことができるからです。だから、戦争や核の脅威がいまもなお、なくなることなく続いているのでしょう。

例えばクラブ活動の場合、その結果として、「優勝」や「優秀」な結果に結びつく場合があるわけです。「よい結果」がでる以上、そこに至る方法論は変わりません。

さて、今回の事例では、まじめなキャプテンがターゲットとなったわけですが、日々の生徒指導場面などでは、落ち着かない生徒や忘れ物をしてしまう生徒、何回言ってもいうことを聞かない生徒、あるいは、わざと教師が嫌がることを言ったり、嫌がらせをしてしまう生徒が教師から叱責を受けるといったことがあります。これらの生徒を丁寧にみていくと、問題行動の背景として、発達に何らかの特性のある生徒や、虐待を受けた経験のある生徒がいます。特に

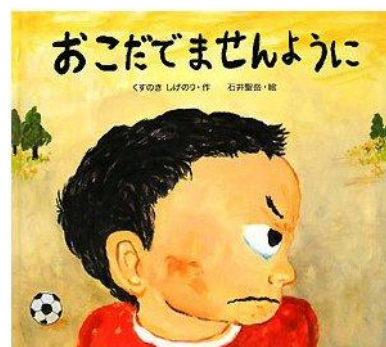
虐待を受けた経験のある子どもたちのなかには、他者との関係性の中で、意識せず状況の「再演」を行い、結果として、教師から暴力を引き出して「再被害化」してしまいがちの傾向があるといわれています。つまり、「殴られやすい子どもたち」というわけです。これに対して、大人の側がこのことを意識してかかわらなければ、殴られやすい子どもたちはずっと殴られることになります。

以前より児童養護施設などの社会的養護の場では、虐待され殴られてきた子どもたちのなかには、職員に反抗し、あるいは他児を挑発し、相手から暴力を引き出しやすい子どもや、性的虐待を受けた子どもたちのなかには、コミュニケーションとして性化行動が生じる例が報告されています。そのため社会的養護の場では、大人からの暴力を「虐待」と捉え、2008（平成20）年の児童福祉法改正により、措置された子どもたちへの「虐待」の防止や児童間暴力の放置（いじめの放置）を規定し、「被措置児童等虐待防止ガイドライン」を作成しています。

学校や社会的養護の場では、何度言ってもいうことを聞かない子どもたちや、困った子どもたちがいます。家庭でもそうかもしれませぬ。

くすのき しげのり作 絵本

『おごだでませんように』には、そんな子どもたちの思いがいっぱい詰まっています。



これまで殴られてきて、いま何らかの問題行動が生じている子どもや、その子どもを何とかしようと殴っている大人のコミュニケーションの方法を変えていくためには、トレーニングが必要になります。児童養護施設、神戸少年の町の野口啓示さんが紹介している「コモンセンス・ペアレンティング」は、日本では家庭復帰プログラムなど親向けに使われていますが、もともとは施設職員が不適切な養育を行わないためのトレーニングとして用いられてきました。

虐待を行う親やドメスティックバイオレンスを行う人、体罰を行う教師に「もう2度と暴力をふるわないか」と約束させてもあまり有効な意味がありません。教師もコミュニケーションスキルやコーチングスキルを学ぶ機会の保障が必要ではないでしょうか。

さて、報道では大きく取り上げられていませんが、いじめ事件があった天津の中学校では、「暴力」根絶にむけて生徒教諭が一丸となって取り組むなか、バレーボール部が全国大会で優勝をしています。脱暴力です。